大阪大学グローバル日本学教育研究拠点主催
「国際日本研究」コンソーシアム共催

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

国際シンポジウム

在日コリアン文学をグローバルな文脈で読みなおす

2023年 7月 29日（土）

第1部 9:30～12:30　第2部 13:30～16:30

場所：大阪大学箕面キャンパス
外国学研究講義棟1階　外大記念ホール
＋オンライン

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点では、日本研究の学際的・国際的・社学連携的展開を促し本拠点をハブとした研究ネットワークを構築することを目指して、さまざまな取り組みを「拠点形成プロジェクト」と位置づけ支援してきました。「在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築」（プロジェクト実施期間 2021~23年度）もその1つであり、今年度の国際シンポジウムはその成果を踏まえて開催されます。

在日コリアンの文学は、日本においても韓国においても国民文学の周縁に位置づけられがちであったといえますが、国民文学の仮構性が自覚され、境界を越える書き手の移動や言語や文化の複数性がむしろ文学的営みの常態であることが認識されるなかで、国際的にも新たな関心を集めています。本シンポジウムでは、韓国と米国から先進的取り組みを行っている研究者を迎え、在日コリアン文学という手がかりからどのような新たな知的展望を開くことができるのか、議論を深めたいと思います。多くの方々のご参加を期待しています。

なお、本拠点では、在日コリアン文学を代表する詩人のお一人である金時鐘氏から、自筆原稿等の資料をご寄贈いただくことになりました。当日は、この資料の概略についても紹介いたします。

9:30 - 9:45

開会の挨拶　田中　敏宏　拠点長（大阪大学理事・副学長）
趣旨説明　宇野田　尚哉　副拠点長（大阪大学大学院人文学研究科教授）

9:45 - 12:30

第1部　キーノート・スピーチ（同時通訳あり）

講演者　金　煥基（東国大学教授）
演　題　「越境/混種のコリアン・ディアスポラ文学」

講演者　Nayoung Aimee KWON（デューク大学准教授）
演　題　Transpacific Archives of Absence:
Navigating Silenced Histories Across Japanese and American Empires

司　会　宇野田　尚哉　副拠点長（大阪大学大学院人文学研究科教授）
ニコラス・ランブレクト（大阪大学大学院人文学研究科助教）

12:30 - 13:30　休憩

13:30 - 16:20

第2部　パネルセッション

趣旨説明　宇野田　尚哉　副拠点長（大阪大学大学院人文学研究科教授）
ニコラス・ランブレクト（大阪大学大学院人文学研究科助教）

パネリスト　（各20分）

シンディ・テキスター（ユタ大学助教授）
Muslim Migrants to Japan in Local and Global Perspective:
From Kim Saryang's "Mushi" (1941) to Shirin Nezammafi's "Salam" (2007)
グローバル／ローカルな視点から見た在日本イスラム教徒：金史良『蟲』からシリン・ネザマフィ『サラム』へ

細見　和之（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
「金時鐘さんの詩をどう読み解くか――作品『化石の夏』にそくして――」

逆井　聡人（東京大学大学院総合文化研究科准教授）
「もう一層加える：ミンジン・リー『パチンコ』と「コリアン」という呼称について」

ディスカッサント　趙　寛子（ソウル大学日本研究所副教授）

16:20 - 16:30

閉会の挨拶　加藤　均　副拠点長（大阪大学日本語日本文化教育センター長教授）

申込方法

下記のサイトまたはQRコードから
7月25日（火）16時JSTまでに参加登録してください。
https://x.gd/XEp3m

問合せ先

本件についてのお問い合わせは、
gjs-eri@office.osaka-u.ac.jp 宛にお願いいたします。

本研究は「令和5(2023)年度「国際日本研究」コンソーシアム事業」の助成を受けたものです。This work was subsidized by the Consortium for Global Japanese Studies in FY 2023.

趣旨説明

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点（Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator, GJS-ERI）は，日本研究の学際的・国際的・社学連携的展開を促すことを目的として，2020 年 12 月に設置されました。本拠点は，大阪大学が日本研究のそのような展開のグローバルなハブとなることを目指して，国際シンポジウム，月例ワークショップ，大学院生のための Graduate Conference in Japanese Studies などの学術イベントを開催するとともに，大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」等の教育プログラムを運営しています。

そのような本拠点の事業のなかの一つに，「拠点形成プロジェクト」の支援があります。学内から，学際性・国際性・社学連携性のいずれか一つ以上を具えた日本研究の取り組みを公募し，重要性の高いものを採択・支援するという事業です。今回のシンポジウムの基盤となっているのは，2021 年度に採択され今年度が事業の最終年度となる「拠点形成プロジェクト」の一つ「在日コリアン文学の国際研究ネットワーク構築（An International Collaborative Network for Research on Zainichi Korean Literature)」です。本学の Nicholas Lambrecht 助教とユタ大学の Cindi Textor 助教授という，国内外の気鋭の研究者を代表者とするこの国際的プロジェクトの取り組みが，今回のシンポジウムの基盤となっています。

本シンポジウムの主題である「在日コリアン文学」は，およそ 100 年にわたる文学的営みの重厚な蓄積を持ちます。分厚い研究の蓄積もあります。しかし，本来的に越境的なこの文学的営みの可能性は，まだ十分に拓かれていないように思われます。旧来の国民文学の枠組に回収するのとは異なるかたちで，この文学的営みが蔵している可能性を十分に拓いていくためには，研究する側も，越境的なネットワークを構築しつつ，それぞれの視点を擦り合わせて，新たな展望を拓いていく必要があるといえるでしょう。韓国・米国・日本の研究者が登壇する本シンポジウムは，そのような考え方に基づいて企画されました。

本シンポジウムでは，韓国と米国から，2 人の基調講演者をお招きいたしました。韓国からお招きした金煥基先生は，在日コリアンを含む在外コリアンの文学的営みの最も包括的な研究を展開しておられる，この領域の第一人者でいらっしゃいます。また，米国からお招きした Nayoung Aimee Kwon 先生は，最近日本語訳も出版された *Intimate Empire: Collaboration & Colonial Modernity in Korea & Japan* (Duke University Press, 2015。日本語訳は，ナヨン・エィミー・クォン『親密なる帝国』，人文書院，2022 年)の著者として知られ，アジア諸地域間・アジア太平洋間の文化的出会いを幅広く視野に収めながら在日コリアン文学にも言及しつつ研究を展開しておられます。お二人の基調講演は，「在日コリアン文学」への私たちの視野を大きく広げてくださることと思います。

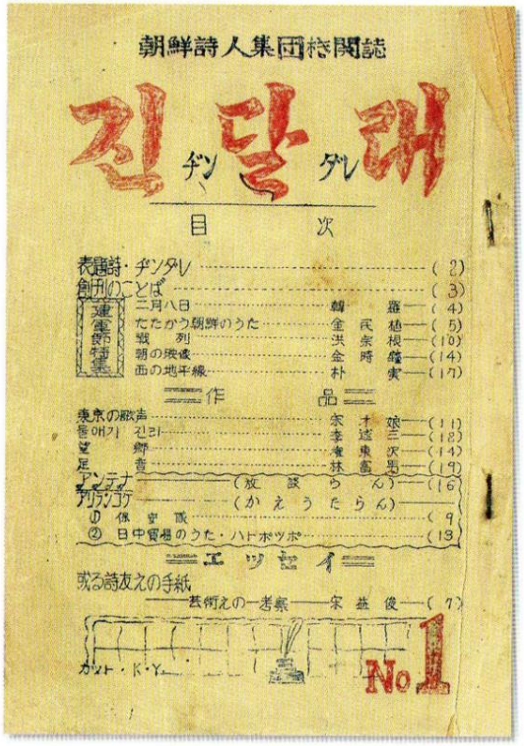
午後のパネルでは，上記のプロジェクトの共同代表の Cindi Textor 先生，ドイツ思想研

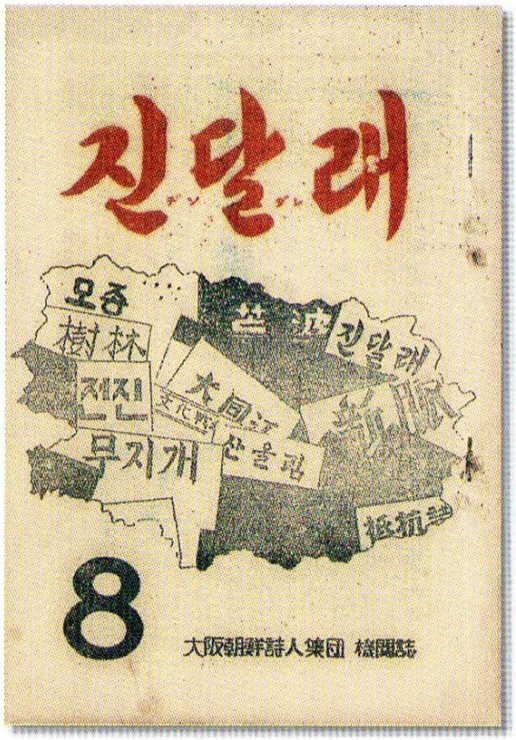
究者で詩人でもあり，比較文学的観点から金時鐘論を展開してもおられる細見和之先生，世界的に話題になっているミン・ジン・リーの『パチンコ』（文藝春秋，2020 年，英語版初出は 2017 年）を日本でいちはやく論じておられる気鋭の日本文学研究者逆井聡人先生にご登壇いただき，それぞれのご専門のお立場から論点をご提示いただき，ソウル大学日本研究所の趙寛子先生からコメントを頂戴したうえで，フロアを含めた討論の場を設けます。

本シンポジウムが設ける国際的な対話の場が，100 年に及ぶ「在日コリアン文学」の重厚な蓄積が蔵する豊かな可能性を，国際的な研究ネットワークのなかで拓く機会となることを期待しています。

なお，今年度の国際シンポジウムをこのようなかたちで開催することになったもう一つの背景としては，ご縁があって，在日コリアン文学を代表する詩人でいらっしゃる金時鐘さんから，自筆原稿等の貴重な資料を本拠点にご寄贈いただいたということがあります。本来的に越境的な文学的営みの刻み込まれた資料の整理・保存・公開のあり方についても，この機会に広く意見交換できればと考えています。

詩人金時鐘さんよりご寄贈いただいた資料の１つ詩誌『ヂンダレ』（1953～58 年）





越境/混種のコリアン・ディアスポラ文学

金煥基（東国大学）

コリアン・ディアスポラは，旧韓末から日本統治時代―解放―南北分断―韓国戦争―近代化―民主化―グローバル時代へと続く韓国の近現代史的変曲点と密接に絡み合っている。それはコリアン・ディアスポラたちの人生の時空間が国内外の時代背景と絡み合った流域/流民化に点綴されたことを意味し，運命的にディアスポラの求心力と遠心力，境界意識と越境/混種に変奏される精神的苦悩を伴う。

コリアン・ディアスポラ文学は，境界意識と越境/混種の時空間で「耐え忍ばなければならなかった刻苦の歴史的体験，位置性，他者との妥協と非妥協，調和と不調和の関係を文学的に省察」したものであり，「異邦人としての生，他者との闘争，迫害の歴史の象徴である「根(ハン)」の情緒と自己（民族）アイデンティティ」を苦悩した。概して，境界意識とトランスネーション，多中心とグローカリズム，混在とダイナミズム，開かれた世界観とが自然に絡み合う。

旧ソ連圏の高麗人文学（「先鋒」・「レニンキチ」・「高麗日報」）をはじめとした朝鮮族文学（「北郷」・「文学と芸術」・「延辺文芸」・「松花江」など），在日コリアン文学（「民主朝鮮」・「漢城」・「三千里」・「青丘」）など，北アメリカのコリアン文学（カナダ，アメリカ「地平線」・「米州文学」・「ニューヨーク文学」・「カナダ文学」など），中南米のコリアン文学（メキシコ，ブラジル，アルゼンチン，パラグアイ「熱帯文化」・「アンデス文学」・「青い鳥」・「ハンサラン」・「カットゥス」など），ドイツとオーストラリアのコリアン文学（「ドイツ韓人文学」・「シドニー文学」など）の時空間が出発，定着，性向など地域別（大陸，国家）で異なるが，基本的に国内外的な政治イデオロギーの変曲点と絡み合った形態の求心力と遠心力を表象する。

最近創刊された「Diaspora Webzine nomo(너머)」（韓国文学翻訳院）は，21 世紀現在のコリアン・ディアスポラの文学を総体的に盛り込んだ談論場として注目されている。「Diaspora Webzine nomo」は，過去，地域別（旧ソ連圏・中国・日本・北米・中南米・ヨーロッパとオーストラリア）に定着したコリアン・ディアスポラの文学地形（文芸誌・団体・作家・作品）が物理的境界（国・地域・民族・宗教・言語）を越えてオンラインで互いに交流・疎通するという点で特別だといえる。このような越境/混種のコリアン・ディアスポラ文学である「Diaspora Webzine nomo」の交流とコミュニケーションのプラットフォームは，韓国（ハングル）文学の拡張とともに歴史，文化，研究に至るまで様々な観点から示唆点を投げかける。

特に，変容するコリアン・ディアスポラ文学地形が韓国の近現代史を記憶するという点，歴史性と民族性中心の求心力より居住国を意識した遠心力（現実主義）に力をいれているという点，さらに強化された形態の国際的，学際的コラボレーション研究を実施しているとい

う点，また，グローバル時代の韓流/大衆文化コンテンツと連携した新しいパラダイムの文化生態系を構築する機会になるという点でそうだといえる。もちろん，このような越境/混種のコリアン・ディアスポラ文学地形は現在，多民族/多文化社会に移行している韓国社会に投げかける意味も少なくないだろう。

Transpacific Archives of Absence: Navigating Silenced Histories Across Japanese and American Empires

Nayoung Aimee Kwon (Duke University)

How does one write about the forgotten, the absent, the silent, the invisible? How does one write about histories, stories, and lives that were never meant to be seen or heard? How are these challenges exacerbated in cases when these stories were made to be invisible and silent, not because they did not happen, not because they were insignificant, not because they were unimportant, but precisely because they did happen, because they were so significant, and because they were so important. How then does one write about these absented realities that have been actively repressed, suppressed, hidden, forgotten, censored, and tabooed? In recent years, I realize this seemingly impossible challenge—or what I have termed elsewhere as a conundrum or impasse—is what I have been pursuing in the past two decades of my intellectual journey, and perhaps for even longer in my own personal journey. These are of course similar challenges and goals shared by those pursuing Zainichi literary studies today. This presentation introduces some of the methodologies, strategies, and challenges that I have encountered while navigating—often without a map—transpacific archives across imperial, national, regional borders in the past two decades. My hope is that the lessons I have learned might be useful for others who are navigating their own journeys.

Muslim Migrants to Japan in Local and Global Perspective: From Kim Saryang's Mushi (1941) to Shirin Nezammafi's Salam (2007)

Cindi Textor (University of Utah)

One avenue for opening "Zainichi" literary studies to broader contexts and fresh perspectives is to consider the works of "Zainichi" writers alongside diverse texts included under the rubric of Nihongo bungaku, or Japanophone literature. Critics such as Kim Sŏkpŏm and Nayoung Aimee Kwon have offered valuable critiques of the "global Japanophone" frame for its lack of distinction among Japanese-language works produced under starkly different conditions: Japanese colonialism and its legacies in the case of "Zainichi" literature, for instance, versus the globalized and cosmopolitan trajectories of many 21st century foreign-born Japanese-language writers. For critics of the contemporary Japanophone, it is often this elision of history or historicity (rekishisei) that presents a problem. In this paper, I attempt a comparative reading that maintains awareness of a vast historical gap between the two texts in question while insisting that reading across such a gap can provide important insights into the question of historical specificity at issue here.

The two texts in question are Kim Saryang's Mushi (1941) and Shirin Nezammafi's Salam (2007), the former touching tangentially on the presence of Muslim immigrants in the Japanese empire, and the latter focusing particularly on Muslim migration and refugee issues in 21st century Japan. Despite this connection, it goes without saying that the texts appeared in very different historical contexts and were written by authors in very different positions—one inside, and one outside the Muslim migrant community. Nevertheless, reading these texts in juxtaposition can reveal the division between "insider" and "outsider" accounts to be somewhat spurious. This is not to say that a sense of equivalence exists across the diverse experiences of foreign-born residents of Japan, as some discourse on the Japanophone risks implying. On the contrary, in both texts, purported "insiders" encounter enormous barriers to representing or even understanding other members of their own communities. In both Mushi and Salam, internal difference comes to the fore, particularly in the form of language barriers of regional dialect and pronunciation rather than national language per se. My reading of these texts suggests that this kind of intra-community (or intersectional) difference is more rather than less visible when placed in an inter-community (or transnational) framework such as that of the Japanophone.

金時鐘さんの詩をどう読み解くか—作品「化石の夏」にそくして—

細見和之（京都大学）

私はこれまで、金時鐘の詩と生涯を、戦後パリで暮らしながらドイツ語で詩を書き続けたパウル・ツェラン（1920－1970）の詩と生涯と重ねて理解することを試みてきた。二人が両親の死に対してトラウマに近い深い罪悪感を背負ったひとり息子であること、故郷（金時鐘にとっての済州島、ツェランにとってのチェルノヴィッツ）を離れて異郷で暮らしたこと、言語（金時鐘では朝鮮語、ツェランではドイツ語）を教えることを生活の糧としていた時期を持つこと、なによりも両者がともに恨み多い言語（金時鐘にとっての日本語、ツェランにとってのドイツ語）で詩を書き続けたこと、しかもその作品の根底に 20 世紀を象徴する暴力の記憶（金時鐘においては日本による植民地体験と四・三事件、ツェランにおいてはホロコーストと戦後も続く反ユダヤ主義）が横たわっていること、これらの点で、金時鐘とツェランはユーラシア大陸の東と西を代表する詩人と私には思われるのだ。

しかし、上記の点にくわえて、その作品が厳密な読解をもとめるものである、という点においても、両者は共通していることに、この間、私はあらためて目を留めざるをえなかった。通常私たちは、作品の解釈は読み手の自由に委ねられている、と考えているだろう。極端な話、作者が喜びを込めた作品が悲しみに満ちた詩として読まれ、悲しみを込めた作品が喜びに満ちた詩として読み解かれるとしても、それはむしろ作品の内蔵しているゆたかさと見なすのが一般的ではないかと思われる。さらに、その作品が作品外の「知識」を必要とするならば、そのことが明確に注記されていなければならない。そういう了解が私たちのあいだでは前提になっているだろう。ところが、金時鐘とツェランの場合、そういう約束にはどうやら収まらないところがあるのだ。

金時鐘の場合、四・三事件にしろ、吹田事件にしろ、明示的に書くことが困難な事柄を対象としつつ、同時に、その一行一行、一語一語に明確な意図が込められている。なんとなく書かれた言葉はただの一語も存在していない。私たちが金時鐘の作品から作者の意図を超えたイメージを描き出すことも不可能ではないし、また、それがなければ、そもそも読者の解釈にはなんの役割もあたえられないことになりかねない。しかし、そういう解釈もまた、あくまで作者の意図を厳密に踏まえたものでなければならないのだ。

なぜ二人の作品はそうなのか。それは詩を超えて、表現論ないし芸術論一般にどういう問いかけを発しているのか。そういった問題を私たちは今後、さらに追求する必要があるだろう。私は以上の問題を今回は金時鐘の「化石の夏」という作品にそくして考えたい。

もう一層加える：ミンジン・リー『パチンコ』と「コリアン」という呼称について

逆井聡人（東京大学）

2017 年に発刊されたコリアン・アメリカンの作家ミンジン・リーの小説『パチンコ』はまたたく間にベストセラーとなり、現在までに 27 か国以上の言語に翻訳されている。在日朝鮮人の女性を主人公としてその一生を描いたこの長編小説は、2022 年の 3 月には Apple TV+でドラマが放映され、その世界的な人気をさらに確実なものとした。一方で、日本を舞台にした歴史小説であるにもかかわらず、2020 年 7 月に日本語版が他の言語に遅れて出版されても日本では一部の人々を除いてはそこまで話題になった作品とは言えないだろう。

なぜ日本においてヒットしなかったのか。近年の韓国現代文学（特にフェミニズム文学）の日本での流行を考えれば、出版文化の衰退をその理由として挙げることは難しい。あるいは、日本の帝国主義による植民地支配が描かれるということに対する政治的な反感が読者にあったというには、作品に対する実際の世間の反応の薄さ、無関心さとうまく噛み合わない。一部の研究者、特に在日朝鮮人文学に関心のある研究者たちは、『パチンコ』が日本でどのような反応を呼び起こすのかということに関して気を揉んでいたにもかかわらず、結果的には大きな肩すかしとなってしまった。

この状況に対してどのような解説ができるのだろうか。一つのアプローチの仕方として、この『パチンコ』が世に提出された際に、北米を中心とした英語圏においてどのような文脈があったのかを確認する必要がある。それはアジア系の移民文学／ディアスポラ文学というグローバルな潮流である。この文脈を念頭に置いて『パチンコ』の世界的展開をみる一方で、この潮流は日本のドメスティックな文化空間にはさほど流れ込んできていないことも同時に確認する必要がある。本発表のなかでは『パチンコ』と共にいくつかの例を出しながら考えてみたい。

大胆な仮説を立てるのであれば、現状において日本の内向的文化空間に突破口を作ったのは韓流／K-pop であり、アメリカ的グローバル文脈ではない、ということだ。日本における「世界」のイメージは、かつてのアメリカ色が急速に褪せていき、ますます韓国を経由して想像されるようになっている。それ故に、ミンジン・リーの『パチンコ』が提示するディアスポラとしての「コリアン」と、日本のポピュラーな「コリアン」イメージは交わることなく、すれ違っている。このように見てみると、改めて在日朝鮮人という呼称の存在が重要な意味を持つ。最後に発表では金時鐘の最新作である「献詩」を読みながら、複数の流れを抱え込もうとする現在の「コリアンタウン」のイメージを確認したい。

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies